

鈴木貞美「『民謡』の収集について—概念史研究の立場から」について、三月四日の研究会の参加者から質問が寄せられました。

「もともと民間歌謡の収集は、『詩経』『楚辞』（漢語訳のみ残存）に発し、「風」（国風）、すなわち地方色をもりこむことを習慣とした。宮廷詩人が作ったものにも、民間のその調子を活かすものがあった。それを受け取った日本では『古事記』『日本書紀』に、民間歌謡の収載が見られ、しかも、それは日本の地方色としてヤマト言葉をいわゆる「万葉仮名」方式で記述した」とあるが、それでは、宮廷でうたわれていたストーリーつきの歌謡を無視していることにならないか、というものです。

これは、歌謡の伝承の場の問題として考えるべきことですが、「叙事詩」「抒情詩」問題とも絡みます。常々、考えてきたことでもあり、この際、見解をまとめてみました。

① まずこれは、「民謡」概念があたかも近代の「発明」であるかのようにいう議論に対して述べた一節です。『古事記』『日本書紀』に収載されるまでに、宮廷でうたわれたストーリーつきの歌謡があったことにはふれていませんが、この水準の議論では不要と思います。宮廷でうたわれたストーリーつきの歌謡の多くも、民間歌謡を転用したものと見なされます。

それ以前に、問題にすべきことかあると思います。

① 『万葉集』『古事記』『日本書紀』『風土記』中に、民間歌謡を掬いにとって収載する際のそれぞれの仕方の問題です。

『万葉集』巻一の巻頭に、雄略天皇のうたとして載せられているうたも、わたしは歌謡の転用であり、雄略に仮託するために改作されていると推測しています。イワノヒメのうたなども民間歌謡の仮託と考えています（これは研究会で話しました）。

『古事記』『日本書紀』とでは、編集の思想がちがいます。『記』で、ヤマトタケルは、伊吹山の白猪との闘いに敗れ、最期に国俣びのうたを詠んで死にます。が、『紀』では、捕虜にした蝦夷を伊勢神宮に送ったのち、うたを詠うことなく、病没したとし、葬儀が執り行われ、景行天皇が労をねぎらい、ヤマトタケルの息子に東国を治めさせたとあります。あくまで王権のために尽くした者としてストーリーが組み立てられている。

記紀神話というが、まるで性格がちがう。編集の思想がちがう。歴史的な意味もまるでちがう。『古事記』が、まるで正史のように扱われるようになったのは、明治近代以降のことです。宣長の主張が近代ナショナリズムによって増幅されたからです。

また、『常陸国風土記』の「童女の松原」の話は、高橋虫麻呂の作を想わせる文体と構成です。そこで相聞歌とされているのは、別々のうたを掬って、並べたものにしかわたしには思えません。(これも研究会で話しました)。そのように、『風土記』と『記』『紀』では歌謡を掬い採り、記述する方式がちがう。

②次に問題とすべきは、『古事記』の神話が「叙事詩」として論じられてきたことです。和辻哲郎『日本古代文化』(1920)がスサノオとヤマトタケルの神話を「叙事詩」として扱って以来のことです。

これは、トロイ戦争についての『イーリアス』などをヘーゲル『美学講義』が論じたことになっています。ヘーゲルは、専制君主が「自由」を独占していた段階の次にくる段階として、半分、神のような荒唐無稽な「英雄」たちが活躍する「叙事詩」を論じ、騎士道物語などにも共通性を見ています。

『イーリアス』も『オデュッセイア』も、吟遊詩人たちが韻文で

うたったものなので、「叙事詩」(epic)と呼ばれていました。『古事記』は韻文ではありませんが、和辻はそれを、古代人が想像力を発揮した「芸術」「文学」という意味で「叙事詩」と呼んだのです。

しかし、『古事記』『日本書紀』の神話部分は、あくまで神話として書かれたものです。「神話」は、信仰されていたものです。今日の意味で、「芸術(文学)として記されたもの」ではありません。

しかし、ヤマトタケルは、自然のなかに潜む邪神(蝦夷の首長も国ツ神として登場します)のコトムケのために戦い、最後に敗れたのです。スサノオも、洪水など自然の猛威を象徴するヤマタノオロチを退治します。彼自身が自然の猛威を象徴する天ツ神として登場しますが。

『イーリアス』などギリシャ神話では、英雄たちは自然の猛威とは戦いません。自然の猛威を象徴する神は登場しますが、野性の猛獣や森の精などを従える神々がいます。そして、ギリシャ神話では神々は不老不死とされています。これは多くの民俗伝承を結び合わせてつくられたものです。これがヨーロッパの神話伝承の特徴です。

日本神話ではタカミムスビの命令に背いたアメワカヒコは死にます。そもそものストーリーの設定がちがう。神話の性格がまったく異なります。それを無視し、また韻文で書かれていない神話を「芸術」扱いすることはできない。

③これを「叙事詩」と呼ぶことに対して、ヨーロッパの「叙事詩」「抒情詩」「劇詩」の三段階発展論を、日本にアテハメようとする議論が出てきます。

土居光知『文学序説』の再訂版(1927)で、巻頭につけ加えた「原始時代の文学」でのことだったと思いますが、彼は、日本古代に、

舞台上「劇詩」が演じられたことを想像力豊かに想定しています。

わたしは、服属儀礼などが繰り返し演じられたことはあると思いますし、そのようなことを書いたこともあります。たとえば天岩戸神話が、繰り返し演じられたかどうかは、疑問です。あれは、言われているように猿女の部の起源神話で、しかも、中臣と忌部氏の起源神話にもなっている。どちらも高天原で祭祀を司っていたことにしてある。のちに脚色した可能性も否定できない。

なお、ヨーロッパの発展段階論における「抒情詩」「劇詩」は個人詠におけるそれです。

個人詠の抒情詩の発生は、宮廷詩人が民間歌謡の替え歌をつくることから発生したと考えれば、格別問題になることはありません。むしろ、屈原のような詩人の個人詠がすでにあつたところで、歌人が個人の抒情歌をつくるということはありえます。発生の過程をそのまま迎るとは限りません。柿本人麻呂の個人詠などには、その意味で、明らかに抒情詩があります。

司馬遷『史記』の「伝」には、屈原の生涯のストーリーが語られ、その詩も引用されています。しかし、それをヒントにして、スサノオやヤマトタケルのストーリーに歌謡が転用されたわけでないと考えます。

「劇詩」はシェイクスピアの戯曲やゲーテ『ファウスト』などのことです。日本では「能」や近松門左衛門の浄瑠璃などを音曲に乗せてうたう韻文の詞章と考えれば、劇詩にあたるものです。

ですから、民間の歌謡を、叙事詩か抒情詩か、などと分類しません。ジャンルがちがうからです。

④ 次に記紀神話を「叙事詩」と呼んだのは、高木市之助です。『吉野の鮎』（1941）に収載された「日本文学に於ける叙事詩時代」（1933）では、神話の全体と民謡とをはっきり区別しています。が、「倭健命と浪漫精神」（1939）では、「英雄時代」論を展開しています。

これは、19世紀後半から20世紀にかけて、イギリス中世文学への関心の高まりのなかで、社会身分が階級的に未分化だった時代に、英雄が神のように敬われたこと、また、それらの伝承（韻文）が、『イーリアス』のような堂々たる物語詩になっていないのは、ヘロドトスのような天才的な詩人がでなかったから、などなどが論じられていました。

いまでは、ヘロドトスも伝説中の吟遊詩人と考えられています。

そして、この「英雄時代」にあたる時代があったかなかったかということが、戦後も論議の対象にされてきました。いまでは、すっかり忘れられているようですが。

⑤ その流れに対して、土橋寛が歌謡はあくまで歌謡として扱うこと、記紀神話のなかに転用されていることを提起したのは、画期的なことでした。が、その議論は、編集の思想にはよく届かなかった。

そこで、伝承中の歌謡が、「叙事詩」か「抒情詩」か、という議論がいまでも続いているわけです。仮託された人物の身になって、その歌謡を詠めば、何らかの情の表明は読み取れます。国誉めの歌謡も、懐郷の情をうたったものとされるわけです。

しかし、それを論じることには何の意味があるのでしょうか。その議論は、そもそもジャンルとしての「叙事詩」「抒情詩」の発生の問題ではありません。次元が混同されているのです。

その議論は、むしろ、民間の歌謡を誰かに仮託することの意味を問うところに向かうべきだと思います。なぜ、仮託して物語と結びつけるのか。

わたしが『万葉集』のイワノヒメのうたをとりあげたのは、その端緒を探ってみたのです。あるいは二上山のうたもそうです。これらは、国際的に見ても、『万葉集』の歌謡に著しい特徴です。

それらと『記』『紀』神話の編集の思想とを関係づけることで、歌物語の発生についての一つの考察がなしうる、とわたしは思っています。

それはむしろ、ストーリーつきの宮廷歌謡の問題をふくむことになるとと思いますが、その際、伝承の場のちがいの問題をはらむことになるとと思います。

しかし、『記』『紀』の歌謡が、みな宮廷歌謡化していたわけではありません。むしろ、ごく僅かしか、確認できないではないでしょうか。

そして、宮廷歌謡のすべてがストーリーつきのものとは限りません。神楽歌には、それなりのストーリーがついていてもいえませんが、催馬楽のように、民間の歌謡が採り入れられ、それなりに洗練されることもあるわけです。

そして、祝詞でさえも、詞章は変化を重ねたはずです。『延喜式』に記載されても、それで固定したとは限りません。これは儀礼歌一般の問題です。

宮廷歌謡なら宮廷という場の規定性の問題を考え、また儀礼歌一般との関係を考えるという具合に、問題の水準を分けて考えてゆくべきではないかとわたしは愚考します。

この問題については、とりあえず、ここまでにしましょう。